

会派視察・研修報告書

会派名 自民クラブ

代表者名 柴田 雅也

1 日 ち	令和 8 年 5 月 2 6 日 (火)
2 視 察 先 研修名、主催者及び会場	東海旅客鉄道株式会社 山梨県都留市小形山 2 7 1 - 2 山梨実験センター (リニア中央新幹線についての調査活動)
3 参 加 者	嶋内九一、柴田雅也、城處裕二、玉置真一、加藤智章
4 調査・研修の テーマ	超電導リニア走行試験への立会
5 主な内容	リニア中央新幹線の導入は、東京一名古屋－大阪という大都市圏を一体化し、ひと続きのメガポリスを誕生させるとともに、日本列島全体の時間距離を短縮し、経済社会活動の効率性を高める効果があります。 新幹線の高速大量輸送能力を併せ持っています。 リニア中央新幹線は、まさに環境保全とスピードを両立する、新時代の交通機関といえるでしょう。 ※山梨県立リニア見学センター資料より 山梨実験センターにて時速500kmの超電導リニア「L 0 系改良型試験車」に乗車しリニア中央新幹線のある未来を体感した。
6 所感、提言事項、 課題等	【柴田 雅也】 1. 視察の目的 現在、2030年代前半に開業を目指して工事が進められているリニア中央新幹線について、実際の超電導リニア車両への試乗を通じ、その技術的完成度、安全性、快適性を体感する。 同時に、東濃地方に岐阜県駅が設置されることによる多治見市をはじめとする東濃地域の広域連携、観光・産業振興への影響と課題を検証することを目的とした。 2. 試乗体験の概要と体感 試乗体験では、実験線において最高時500kmの走行を体験した。 加速と浮上移行の滑らかさ、始動時はタイヤ走行であるが、時速約150kmに達した段階で「浮上走行」へとスムーズに移行し、滑らかな走行を実感した。 車内の快適性と静粛性について特に400kmを超えて500kmに達するまでは思ったより振動が大きかった。また、トンネル区間に入る時は耳圧の変化を懸念していたが、違和感は最小限に抑えられて

いた。車内騒音は許容範囲内であって、今後の営業車両としての完成度は近づいていると実感した。

東京～名古屋間を時速500km約40分で結ぶスピード感は東濃地方にもたらすインパクトの大きさを改めて強く認識した。

3. 期待される効果と課題について

中津川市に設置される「岐阜県駅」は、東濃地方全体の玄関口となる。このインパクトを多治見市の活性化にどうつなげるかが重要である。

東京から岐阜県駅まで約30分圏内となる。多治見市が誇る伝統産業である美濃焼や、昨今推進している企業誘致へのアクセスが劇的に向上する。国内外からのビジネス客、最先端技術者・研究者や観光客を誘致する絶好の好機として捉えなければならない。

ビジネス・研究拠点の可能性として首都圏との時間的距離が縮まることで、高度人材の還流や、企業のサテライトオフィス誘致、広域的なビジネス連携の可能性が広がると考える。

そのためにもリニア岐阜県駅から多治見市へのアクセスについてJR中央本線（中津川～多治見間）の利便性向上や道路網の整備が重要である。

また、リニアで来た観光客をいかに多治見市の魅力へ回遊させるか東濃5市が連携した広域観光ルートの策定が必要である。

今回の試乗を通じて、リニア中央新幹線がもたらす未来の交通インフラとしてのポテンシャルを確信した。

しかし、その期待する効果は待っていれば来るものではない。中津川市に駅ができるからこそ、同じ東濃圏域の多治見市が選ばれる都市であるために都市計画のアップデートや美濃焼を中心とした地場産業の振興支援、定住化など関係人口の拡大政策を提言・推進していく必要があると考える。

今後も、工事の安全な進捗と環境への配慮を注視しつつ、リニア時代を見据えた「持続可能な多治見市」の構築に向けて取り組んでいくことが重要である。

【嶋内 九一】

視察内容と体験結果

走行性能：

実験線（約40km）にて、最高時速500kmの走行を体感。時速約150kmでタイヤ走行から磁気浮上走行に切り替わる際の振動・音の変化を確認した。

車内環境・快適性は時速500km到達時も、航空機のような急激な加速感はなく、極めてスムーズであった。車内の騒音レベルは時速400kmを超えた辺りから大きかった。

リニア見学センターの視察では、リニアの仕組み（超電導磁石による浮上・案内・推進の原理）について見学した。

所感：

多治見市は、リニア中央新幹線「大針工区」をはじめとするトンネル工事や環境保全対策が現在進行形で進められている当事者都市である。今回の試乗体験を通じ、単に「未来の乗り物」としてではなく、本市が受ける影響とチャンスを実際のものとして捉え直す必要性を強く感じた。

6 所感、提言事項、 課題等	【城處 裕二】 スムーズな加速と時速500 km を体感してきました。東京（品川）と名古屋を40分で結ぶリニア新幹線。一日も早い開通を祈念致します。 【玉置 真一】 山梨実験センターにて超電導リニア走行実験の立会いに参加してまいりました。 日本に新たな飛躍と確かな未来を！ 時速500Kmという革命的スピードを手に入れ、東京・名古屋・大阪の3大都市を結ぶ計画です。 新しいL0系改良型試験車両M10に乗車、車内は4列シートで、新幹線が5列なのでリニアは在来線の大きさです。 営業線用の車両により近づけて開発されたL0系実験車両ですが、L0系改良車はさらに内装や座席が変更されているといえます。 超電導リニアと呼ばれる日本固有の技術で地上の軌道に設置される推進コイル・浮上・案内コイルと車両に搭載される超電導磁石により走行します。 低速度域では通常の鉄道同様車輪がレールに接触し走行しますが、ある速度に達すると約10cm浮上し高速走行します。 所感 500Km走行までの加速・0 Kmまでの減速時のGがスムーズでその技術が素晴らしいと感じた。 正直トンネル内での500Km走行時は地殻変動などが発生した場合は怖いと思いました。 また、速度0 Kmから折り返しはバック走行状態だったが、案内がなければわからないくらいスムーズでした。 実現まで車両改良され、更に快適で安心・安全な移動手段となる事であろう、しかしリニア中央新幹線計画工事は、山間部トンネル工事、駅工事、都市部のトンネル工事と課題・問題解決は未知数な部分があり、今後も工事の安全・環境の保全・地域との連携を重視して早期開業に向け沿線各地で工事を進めていくとの事であった。 実験センターへ向かう車窓から中央本線美乃坂本駅の西側に建設中のリニア中央新幹線の駅現場を見た。島型プラットフォーム2面と副本線を持つ高架駅になる予定である。造成工事、建築物など敷地も含め改めて巨大プロジェクトであると感じた。 リニア開業後、多治見市をはじめ東濃5市は日本においてどのような位置づけになっているか、またそれまでの準備について慎重かつ迅速に取り組む必要がある。 【加藤 智章】 1. 超電導リニアの技術や安全性、運行システム等について理解を深めるとともに、今後開業が予定されるリニア中央新幹線が地域経済や住民生活に与える影響について調査研究をすること、実
---------------------------	--

際に体験乗車することで、超高速鉄道としての性能や快適性を体感し、将来的な広域交通ネットワークのあり方や地域振興への活用可能性について知見を得ることを目的として視察した。

2. 視察の感想

今回の体験乗車では、最高時速500kmを超える走行を体感し、その加速性能や走行時の安定性、静粛性の高さに大きな驚きを感じた。

車内では高速走行中も揺れが少なく、快適性が高いことを実感した。また、超電導技術による浮上走行は日本の高度な科学技術力を象徴するものであり、世界をリードする国家プロジェクトであることを改めて認識した。さらに、単なる交通インフラ整備にとどまらず、人・物・情報の流れを大きく変える可能性を持つことから、今後の都市づくりや地域間連携に与える影響の大きさを感じた。

3. 多治見市として期待される効果

【期待される効果】

①広域交流人口の増加

リニア開業により名古屋・東京間の移動時間が大幅に短縮されることで、多治見市へのアクセス性向上が期待される。観光、ビジネス、大学交流など人の往来が活発化し、交流人口の増加につながる可能性がある。

②中京学院大学との連携強化

多治見市への大学移転に伴い、首都圏や中京圏からの学生・研究者との交流が活発化し、教育・研究分野での新たな連携が期待される。

③企業誘致・産業振興

交通利便性向上は企業立地の魅力向上につながり、新たな企業進出や雇用創出の可能性を高める。特に製造業や先端技術産業において波及効果が期待される。

④観光・地場産業の振興

美濃焼や虎渓山永保寺など本市の観光資源へのアクセス向上により、観光客増加や地域経済活性化が期待される。

7 写真等

※視察の場合は必須、
研修の場合は任意



※視察先、研修先ごとに1枚作成すること。

※「6 所感、提言事項、課題等」は、参加者全員分を記載すること。